第 105 号

館長だより

山形県産業科学館

令和６年１０月４日(金)

発行 館長　加 藤 智 一

イマーシブ

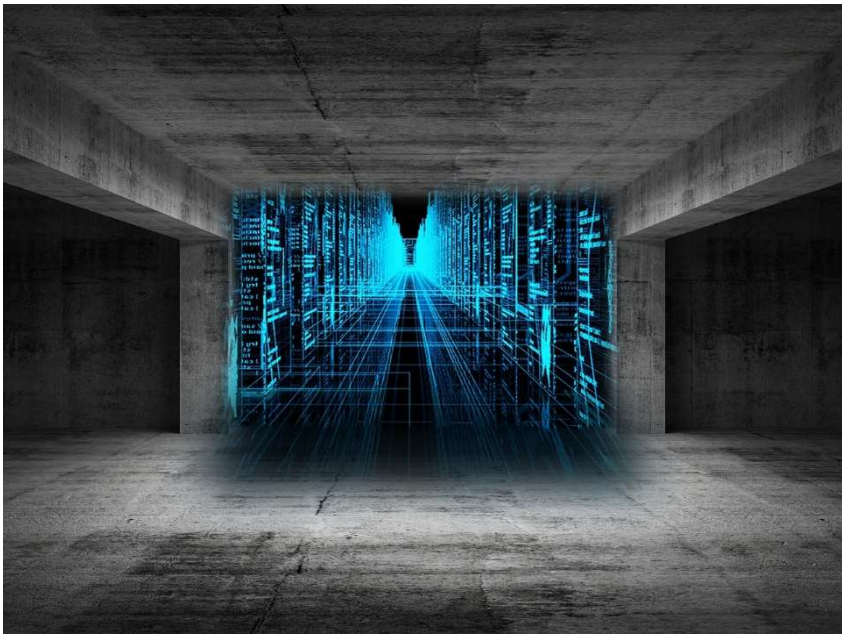
「イマーシブ」とは、日本語で「没入」と訳されています。始まりは、2000 年代ロンドンの劇場での「体験型演劇作品」にあるそうです。従来の、観客が客席に座り、ステージ上の演者を鑑賞するというスタイルから、リアリティのある音響や映像、空間の中で、観客が物語をどう進めるのかを決定することにより、その作品の世界観に入り込んだような体験ができるコンテンツをそう呼ぶようになりました。

演劇だけでなく、旅行、アート、イルミネーションなどのエンタメ業界はもちろん、訪れた人が身体ごとその空間に没入できるという特性を活かして、現在では環境学習や職業体験などの教育の分野や、医療分野や癒しを求める大人達の間でも注目を集めています。

とはいっても、具体的にイメージがわかない方もいるでしょう。現在言われているところのイマーシブ体験とは、ユーザーが自らの五感を通じて完全に別の世界に没入できる体験を指していて、視覚だけでなく、聴覚、触覚、嗅覚、さらには味覚までを含むことができ、体験者に強い感情的なインパクトを与えることができるまでに進化しています。仮想現実(VR)や拡張現実(AR)、さらにはミクストリアリティ（MR）などが普及し、イマーシブ体験はますますリアルでインタラクティブなものになっているようです。

NHK 朝の「おはBiz(10.02(水))」では、「都心のオフィスに没入型リフレッシュ空間」と題して、東京・千代田区にあるシェアオフィスの共有スペースの様子を紹介していました。イマーシブな空間で疲れを取ったり、集中力を高めたりすることで、生産性を上げてもらおうと、オフィス運営会社が導入したもので、360°カメラで撮影した映像を、天井と前面、左右両側に、歪みや切れ目なくひとつなぎに映し出し、自然の空間に没入できる空間の中で、鳥の声も流れていて、森林浴気分の利用者は「すごくリフレッシュできる」と話しておりました。また北海道では、イマーシブを産業の担い手確保に生かそうと、北海道庁林業木材課は９月、イマーシブな空間を活用して林業の仕事を知ってもらう授業を、道立高校の普通科で開きました。イマーシブな空間で、1 本 1 本の木と向き合う林業の現場へといざない、チェーンソーの響きとともに伐採した木が倒れる映像や、苗木を育てる仕事の映像も組み込まれており、林業が木材の生産だけでなく、自然の循環を守る役割があることも伝えました。生徒の一人は「森林の中に本当にいるかのように思った」と話していました。

また、イマーシブ体験を語る上で外せないのが医療分野です。現在では、VR を利用した手術トレーニングやリハビリテーション、さらには精神療法など、医療現場での応用が進んでおり、患者や医療従事者にとって、安全で効率的なトレーニングが可能となっています。

観光業界でも、仮想ツアーや歴史的な再現シミュレーションを通じて、観光地の魅力を最大限に伝えることが可能になりました。これにより訪問前にその場所を体験し、興味を引き立てることができるようになってきました（だったら行かなくても良いのでは？と思う方もいるでしょうね)。

ついこの間までは、所詮ゲームの世界、仮想空間の出来事で現実味がないと、たかをくくっていた世界が、リアルに自分の身に迫ってくる感覚へと進化し、ちょっと恐ろしさすら感じます（私達おじ様おば様世代は特にそう思う)。お願いだからこの技術、戦争にだけは応用しないでください。近い将来、どこかの誰かを平気で殺し、どこかの誰かに殺されて、死んだ事すら気が付かない、なんてのは御免です。